

巻 頭 言

特任教授 高 見 茂

コロナ禍が収まらない。昨年以來、世の中が変わってしまった。大学においても以前の生活環境は一変し、with コロナの時代に教育研究そして社会貢献をどう推進するか、ということは新たなテーマとして位置づけられつつある。こうした状況の中で、われわれのユニットもどのように対応すべきか改めて検討することが重要ではないだろうか。

古来、パンデミックは歴史を動かし社会を変え、新しい時代の扉を開けたのは歴史の証明するところである。「アテナイの疫病」ないしは「アテナイの熱病」と称せられる病は、現在においてもその正体は定かではないが、紀元前431年の夏、ナイル川上流のスーダンのハルツームから始まり、エジプト、ペルシアそしてギリシア本土に至ったとの説が有力とされる。ゆえに、古代ギリシアの民主ポリス国家の衰退は、衆愚政治の所産だとの見方がある一方、ペリクレスの失脚に加えてパンデミックが、当時スパルタと対峙していたアテネ衰亡の契機となったとの向きもある。同様に14世紀にヨーロッパを席卷したペスト禍は、1348年にフィレンツェに上陸の後、フランス、ドイツへと拡大し、ドイツではパンデミックの責めを異教徒たるユダヤ人に負わせ、虐殺・攻撃が横行した。その結果才能溢れる多くのユダヤ人達が、宗教的に寛容な政策を採っていたローマ教皇領に逃れ、光溢れる「ルネッサンス」の大輪を開花させ、近世の扉を開けたとされている。

今回のコロナ禍も歴史に残るパンデミックであり、with corona、post coronaの時代についての言説は、何れも社会の大変革をもたらせるとの見方では概ね一致している。つまり「元には戻らない」という事では人々の見方は概ね一致していると指摘できよう。今回のパンデミックは、現代社会の通信インフラの普及整備状況の遅速、ワクチン開発技術力、ウイルス克服のための社会統制・政治の在り方の優劣を浮き彫りにし、どの国が新たなPaxなのか、新たな世界秩序の形成主体は誰なのかを明らかにするものと思われる。アメリカが改めてPaxとして振る舞うのか、近年台頭の著しい中国がさらに戦狼外交を強化し世界制覇を目指す道を邁進するのか未だ定かではない。筆者のささやかな願いは、人権、議会制民主主義そして法治主義の原則が遵守される社会であって欲しいということである。

コロナ禍は、特にわが国高等教育界において、潜在化していた矛盾を一挙に炙り出す契機になったと思われる。世界の高等教育は、今回のパンデミックを契機として、教授方法の改革・高水準化を模索している。遠隔教育の進化、対面と遠隔教育を融合させたハイブリッド教育の強化、実習科目へのVR、MRの導入等様々な検討が始められている。われわれもこれを奇貨として、イノベーションを推進する他に生き残る途はあるまい。覚悟を決めて新たな航海に出ようではないか。